

である。以前の調査報告によると、墳丘を持つ古墳は30基ほど存在し、横穴まで含めると総数は200基を数える一大古墳群であったことがわかる。

本稿はその1として、博物館に収蔵されている立田山古墳群出土遺物の概要を紹介するとともに、遺物と立地から各古墳を古墳群の一部と捉えて再検討を行い、古墳群の成立の理由を探り、その位置づけや展望を考察するものである。その2では遺物実測図の提示、周辺の同時代の集落との関係や生業、特に白川中下流域における周辺開発、再開発などについて触れる予定である。



写真1 「熊本市遺跡発掘速報展 2020」
立田山古墳群出土遺物の展示風景

1、研究史

ここでは、立田山古墳群にかかわる調査報告を『昭和44年度熊本市文化財調査報告書（Ⅱ、北部地区）』1971年刊（以下、北部地区報告書という）から引用する。この報告書は基本かつ重要な資料ながら、刊行が古く現在では入手困難で、現状では不明な事柄が多く記述してあるからである。なお、横穴群については美濃口雅朗『つつじヶ丘横穴群』に既往調査について詳述されているので、そちらをご覧いただき、今回紹介する遺物の出土がある高塚の古墳を中心に引用する。また、適宜、改行し、年号には西暦を付加し、漢数字は算用数字に改めるなどした。

Ⅱ、各説編 3. 立田丘陵地区 (4) 黒髪町宇留毛地域

この地域の白川ぞいには横穴古墳群が集中している。

③長薫寺古墳 熊本市黒髪町宇留毛

古墳があったのは豊肥線立田口駅の西方約100m、国道57号線にのぞむ立田山南麓台地上に位する。さらに厳密にいうと現地は熊本市黒髪町宇留毛731番地、長薫寺（住職、高須信因氏）の境内西側にあたる。当時熊本県教育庁社会教育課で文化財を担当しておられた宮辺末雄氏と乙益は、別な要件で現地を通りかかった。たまたま住職より寺域の一隅に古墳らしきものがあるとの報をうけたので、あらためて期日を定め測量調査を行なった。

調査は乙益と宮辺氏の2名。平板測量用具一括を携行し、現状だけを測図した。当時はまだこの封土が古墳であるかどうか不明でなく、巨大な石材が露出している程度であった。（昭和28年（1953年）4月4日調査）

しかるに後日、寺域拡張工事にあって、旧配置を復元することもできないまでに破壊された石材群が出土した。おそらく江戸時代頃の開墾にさいして破壊したのであろう。住職高須氏は慎重を期し、乙益に連絡されたので現地を踏査した。しかし、石組の旧態を存したのは玄室奥壁の一部だけであった。おそらくかつて石材を掘り取り、何かに使用するため破壊したのであろう。

当時残存していた封土は直径約13m、高さ2.2mを有し、南半分はすでに破壊されていた。おそらくもとは直径約18m、高さ4m位の小円墳であつたらしく、安山岩の自然石を積んで構築した横穴式石室があったことがわかる。工事の終了後排土の中から採取したという鉄鍬2本

分と、須恵器の細片があった。鉄鏃の1本は完形に近く、現存長さ13.6 cm、刃幅1.2 cmを有し、細根棘篋被式に属する。刃部が短い割合に茎が長く、茎には篋被が残っていた。他の1本は茎だけの残欠品であるが同形式に属し、古墳時代後期の所産であることが明らかである。須恵器の残欠も特色がなく、甕と台付壺形土器らしいものを採取したが、器形の復原は困難である。

おそらく長薫寺古墳の年代は、7世紀前半頃の所産と考えられる。そして、同じ長薫寺の裏山に分布する横穴群や立田山南麓古墳・宇留毛神社古墳群・宇留毛小磯橋際横穴群・つつじが丘横穴群・浦山横穴群など一連の関係を有するものと考えられる。(乙益)

⑫宇留毛神社内古墳 熊本市黒髪町宇留毛小字上屋敷

宇留毛神社社殿北側の山林内に、封土の外形を残す古墳3基が認められる。いずれも径10～15 m、高さ3 m余とみられる小さな円墳で、すでに盗掘されたかと思われる。付近には第二次世界大戦中に、防空施設として作られた自動車掩体壕の残骸と伝えられる土塁と深い溝があるが、これも古墳を破壊して作ったものだという事である。

この種の小円墳は、以前この附近にはかなり多かつたらしい。内部構造は発掘調査をしていないのでわからないが、この付近で発掘調査が行われた立田山南麓古墳上、下各墳の如きものではないかと思われる。昭和45年(1970年)3月現在、この古墳周辺はヒノキの植林中で、古墳の詳細な調査は不可能な状態である。(S 39 (1964), 2・S 45 (1970), 3調査)(東・横田)

⑭立田山南麓古墳(上)

熊本市の北東部に横たわる立田山南麓には、かつて昭和30年(1955年)ごろまで約10基近い円墳が点在していたが、今では宇留毛神社境内に残る石室墳の残骸3基のほかみるべきものはない。ここにのべる横穴式石室墳もその一つで、昭和30年(1955年)3月4日、熊本市土木部が施工した立田山登山道の開設工事にさいし、突発的に発見されたものである。当時東光彦、平岡勝昭と乙益の三名が応急の調査を行なった。

古墳は黒髪町宇留毛部落の裏手にあたる、宇留毛神社から北西へ約300 m、立田山の山裾に近い南斜面のせまいステップから発見された。古墳の南にはせまい小道があり、これをはさんで東洋繊維立田山農場のラミー畑があった。古墳のまわりは杉林と一部の雑木林からなり、すでに古く開墾し畑にした形跡がみとめられた。

この古墳は直径11 m、高さ3.75 mの円墳で、東面して開口する横穴式石室を設ける。天井部はすでに古く盗掘時に破壊され、石室内部は埋没していた。石室の総奥行3.80 m、玄室奥行2.26 m、幅1.96 m、側壁の残存部高1.60 mを有し、石材はすべて安山岩の自然石を用いていた。床には全面にわたって安山岩の塊石を小割りにしたものを敷きならべ、入口の床にはやや大きな角石を2個ならべ、カマチの役目を果たしていた。入口の前庭部も両側を巨石積にし、床には小石を敷きならべていた。

石室の床面には盗掘者が遺物を持ち去るにあたって、とり残した若干の副葬品残欠があり、奥壁下には鉄鏃やその残欠が6本ばかり検出された。石室の中央には刀の鏢と金環2個、刀片、刀子片、鏃片などが散乱し、東壁下には須恵器の坏残欠や刀子・金銅の薄片などが散布し、遺体埋葬の位置についてはほとんど手がかりがなかった。

この古墳を特色づける重要な遺構は、入口前庭部西壁下に検出された遺構であろう。すなわち入口の左袖石と、西側壁にはさまれたコーナーに、須恵器の横瓶1個と坏の身と蓋を合計5個重ねてならべ、その壁ぎわに鉄鏃12本分を束ねて斜めに突立てていた。それらの配置はまず外側

に横瓶を水平に置き、その隣に坏の身と蓋と身を重ね、蓋は裏かえしに重ねていた。その隣に坏の身2個と蓋を重ねてならべ、あたかも用済後片づけたような感があった。とくに鉄鏃は束ねたものを、紐のようなものでしばったらしく、束のまま錆着していた。おそらく墓前祭祀に供した後、片隅に取片づけたのであろう。

横瓶は全高14.5 cm、口径7 cm、胴径15 cmを有し、灰青色を呈する。須恵器の坏や蓋はいずれもセットとして用いられたらしく、蓋の破れたものには、破片が足りないものがあった。鉄鏃はいずれも同形式と考えられ、錆着いちじるしい。刃先の短かい割合に茎が長く、一部の完形品から判断して細根棘篋被式に属する。おそらく古墳の成立年代は、須恵器の様式から判断して7世紀初頭の所産と考えられる。

尚、このような石室内部に割石を敷きつめた古墳は熊本市の周辺に多く、とくに金峰山の西麓や南麓にいちじるしい。しかもそれらは安山岩の豊富な山の斜面に集中し、時間的にもほぼ併行しながら発達している現象は注目される。(乙益)

⑮立田山南麓古墳(下) 熊本市黒髪町宇留毛

昭和22年(1947年)12月、東洋繊維ラミー畑の開墾作業中古墳が発見された。現地は宇留毛神社の北約100 mにある北に傾く斜面で、発見時すでに天井部は失われ、地表下に自然石をもって構築した小型の横穴式石室があった。石室は奥行、幅共に約1.5 mで小さく、約1.8 mの羨道がつく。古墳内から数本の鉄鏃と須恵器の破片が出土している。

(S 22 (1947). 12. 22・23 調査) (高士・上野)

『北部地区報告書』以外で、立田山南麓古墳群関連と思われる下の記述がある。今のところ場所は特定できていない。

「それは昭和22年(1947年)夏の暑い日であった。熊本市立田山の南麓では農道開設工事にあたり、小さな石室古墳が発見された。こわされ行く古墳を汗だくになって発掘し、図面をとっていたのは高士與市さんを中心とする東洋語学専門学校(現熊本学園大学)の学生諸君であった。その古墳は石室がまるでは箱式石棺のように長方形を呈し、床から天井石までわずか60センチメートルにもみたくないもので、今でいう堅穴系横口式石室の一種であった。しかし、遺物は何も出土しなかった。(後略)」

「上野辰男さんを悼む」國學院大學教授 乙益重隆

1986『上野辰男蒐集考古資料図録』第1集「縄文時代特殊遺物」編序文 肥後上代文化研究会

⑲立田山狐穴古墳参考地

立田山の山神明王より50～60 m程稜線を登ったところに、古くから狐穴と呼ばれているところがある。宇留毛神社の氏子総代の一人吉本氏が現場に案内してくれて、自分等の子供の頃よく入って遊んだと話してくれた。現在叢竹のため穴の所在は不明であるが、小丘状をなし、古墳石材らしい石があるので、この付近に多い小円墳の一つではないかと考えられる。所在地は小字四本松である。

なお、この近くで森下調査員が布目瓦一片を採集したが、狐穴との関係その他は不明である。

(S 45 (1970). 3. 8 調査) (鈴木)

(5) 黒髪町下立田地域

旧来立田本村と呼ばれていた。高236石余で、立田山の南斜面一帯である。本村は現在の東屋敷、

西屋敷を中心とする地域で、小村では西端に山口村があった。

②城床古墳群

林業試験場の試験林の東、カブト山の北、下立田神社のある小丘陵に古墳の残骸らしい石材群がいくつかある。密生した竹と雑木林の中であるため分布状況等明らかでないが、古墳群であることに間違いなからう。

肥後国誌の下立田村の条に次のような記事があるが、天神社とは下立田神社のことであろう。

窟 天神社ノ森ノ内ニアリ、寶曆ノ初此森ノ木大風ニ倒レ、其根ヲ穿シニ、土中四五尺下ニ切石ニテ壁ノ如ク其中方四五尺ノ処アリテ、亦横ニ石柱ヲ立テ這入程ノ口アリ、其奥ニ一間可リ、四壁天井切石ニテ築キタル所アリ、所以ヲ知ラス、里俗ハ昔日立田将監立田在城ノ時ノ兵糧蔵ナリト云エトモ不分明、後又土ヲ以テ之ヲ埋メタリ。

(S 45 (1970). 2. 1 調査) (上野)

現代語訳

窟(いわや) 天神社(下立田神社)の森の中にある。江戸時代宝暦年間(1751～64)のはじめ頃、この森の木が大風で倒れた。その根を掘り取ったところ、1.2～1.5 mほど下の土中に、切石で壁のようにつくった1.2～1.5 m四方のところがあり、また、横に石柱が立っていて這って入れるほどの口があった。その奥に1.8 mほどの四方の壁と天井を切石で築いた所があった。由来はわからない。地元では昔々立田将監が立田城にいた時の兵糧蔵だろうといわれているが、詳細は不明である。後にまた土で埋め戻した。

※記載内容からみて、横穴式石室であろう。

③白石古墳 熊本市黒髪町下立田

この古墳は、立田山の西南麓、農林省林業試験場九州支場と、東洋繊維株式会社所有地の境界にあるもので、未調査のためその構造は不明であるが、宇留毛神社付近に分布する円墳群(小形の横穴式石室墳である)と同様なものではないかと思われる。

昭和35年(1960)4月25日、当時熊本大学学生であった伊藤奎二が、立田山一帯の考古学的踏査中、付近の中学生連が盛に狸掘りをやっているのを発見して、補導中止させたことから確認されたもので、おびただしい須恵器の出土がみられる。

その器形は甕、壺、坏、高坏、提瓶(?)等各種で、大部分が破片であるが、復原可能なものも多い。鉄器(馬具類?)残片もみられるので、破壊された古墳と思われるが、なお今後の調査を要する。

(S 35 (1960). 4. 25 調査) (東・伊藤)

④常楽寺跡

リデル・ライト児童公園の東側から、林業試験場の南の斜面の墓地一帯が常楽寺の跡である。現在寺は既になく、歴代住職の墓と小笠原氏の本家と分家の墓地が残っている。肥後国誌にはこの寺について次の記載がある。(以下、省略)

(S 45 (1970). 3. 15 調査) (鈴木)

これらの記述をもとにした1996『新熊本市史』史料編第一巻考古資料古墳時代には女瀬平横穴群などの記載がある。1998 同通史編第一巻原始・古代編「第八節熊本平野北縁の古墳」には、主な4カ所の地域のうち①白川右岸の立田山の南麓部として示され、「立田山南麓」(松本健郎)に概要が記されている。

2、土器の観察

今回は土器を中心に報告し、他の鉄製品などについてはその2で報告する。

(4) 黒髪町宇留毛地域

A、宇留毛横穴式石室墳出土遺物（写真4）

ラベルは「熊本市立田山宇留毛 横穴式石室墳出土副葬遺物 1955. 3・4 → 6 乙益・平岡・東」である（写真2）。現存する遺物は装身具3点、鉄製品13点、土器10点。装身具と鉄製品は実物大のスケッチが残されており分かり易い。スケッチ注記には赤青鉛筆で「宇留毛（小）石室古墳副葬品見取図 一九五六・二・一七 Ⅱ 0」とある（写真3）。記載の遺物番号順だとU・1 刀子、U・1 鉄鏃茎？、U・2 鉄鏃、U・3 鉄鏃、U・4 鉄鏃、U・6 刀子、U・7 刀子、U・9 太刀鏢、U・11 耳環、U・12 耳環、U・13 土器、U・14 土器、U・15 刀子、U・16 太刀責具、U・17 耳環である。U・1が2点ある一方でU・5、8、10がない。

装身具は耳環3点で現存し、鉄製品はスケッチでは10点あり太刀鏢1点、太刀責具1点、刀子4点、鉄鏃4点？で、鉄鏃には現状行方不明品がある。土器は須恵器が9点で平瓶1点、坏蓋3点、坏身4点、高坏脚部片1点と土師器片1点の合計10点である。土器には墨書注記「肥後、熊本市黒髪町宇留毛 石室古墳 1955, 3・6」と須恵器と土師質焼成須恵器には各個体に遺物番号A・B・C・D・E・F. と13.14. がある。A. 平瓶、B. 坏身、C. 坏蓋、D. 坏身、E. 坏身、F. 坏蓋、F. 高坏脚部片、13. 土師質焼成坏身、14. 坏蓋で、Fが2点あり、土師器片には遺物番号はない。

蓋坏の焼成時のセットは大きさ、器形、焼成、色調、胎土、技法、ひびの入り具合の点からみて、C. 坏蓋とE. 坏身、F. 坏蓋とB. 坏身、14. 坏蓋とD. 坏身の3セットが想定され、同産地での同時焼成とみられる。特に、坏身のB・D・E. はよく似ており、B・D. は同工人の作かもしれない。坏身のひびはすべて貫通しており、水物の容器としては役に立たない。

須恵器の産地は13. 土師質焼成坏身を除いて、焼成、色調、胎土からみて他はすべて同産地と思われ宇城窯跡群の可能性が高いが、今後は立田丘陵の窯跡も視野に入れて調査を継続する必要がある。時期はTK209型式、7世紀前半である。

各土器の概要

A. 平瓶 略完形、口径6.8 cm、頸部長4.3 cm、胴径15.2 cm、器高14.9 cm。焼成軟質不良、色調白灰色、胎土精良で白色粒と黒色粒を含む。体部下半回転ヘラ削り後全体にカキ目調整、製作は通有の技法による。

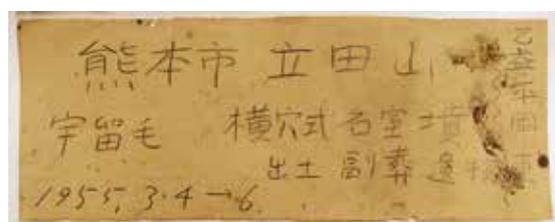


写真2 オリジナルの遺物ラベル

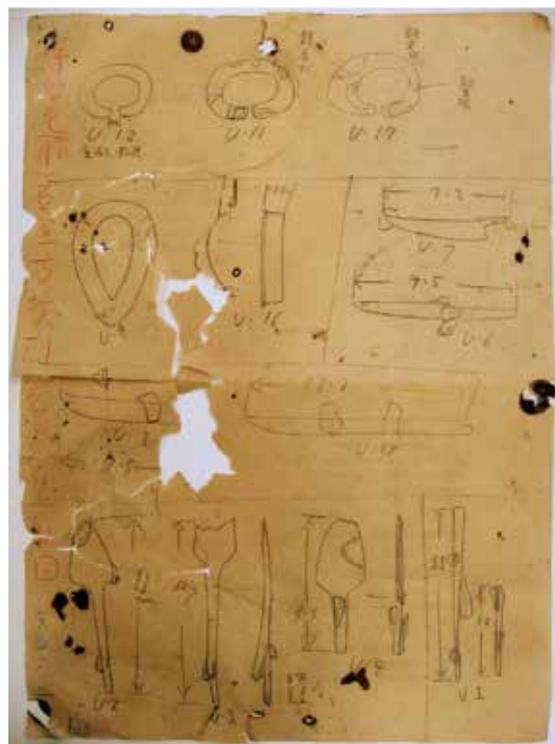


写真3 遺物スケッチ

B. 坏身 完形、口径 12.0～12.6 cm、受部径 14.1～14.7 cm、器高 4.1 cm。焼成良好だが硬質ではない、色調灰色、胎土精良で白色粒と黒色粒を含む。立ち上がりは低く内傾し端部は丸く折込でつくられ、受部は粘土細紐を貼付けしつまみ出して成形するので端部は鋭い。底部に貫通する大きなひび割れと内面二方向の仕上げナデ、外面右回転ヘラ削り。

C. 坏蓋 1/2 残存、復元口径 14.0 cm、器高 3.9 cm。焼成良好、色調灰色、胎土精良で白色粒と黒色粒を含む。体部には稜の名残もすでになく、口縁端部は丸く仕上げる。底部内面不定方向の仕上げナデ、外面右回転ヘラ削り。ひび割れは現状では無いが、真半分に割れているのは、ひび割れが原因かも知れない。注記状況からみて調査時には既に半分の残存であり、口縁部が欠けて接合してあるのは、蓋坏では本品だけである。

D. 坏身 完形、口径 12.0 cm、受部径 14.2 cm、器高 3.9 cm。焼成良好底部一部軟質だが火襻がある。色調灰色で底部外面の一部は白灰色、胎土精良で白色粒と黒色粒を含む。立ち上がりは低く鈍く内傾し端部は丸く折込でつくられ、受部は粘土細紐を貼付けしつまみ出して成形する。体部外面には粘土紐巻上痕がある。底部に貫通する大きなひび割れと内面二方向の仕上げナデ、外面右回転ヘラ削り。また、受部には鉄製品の赤褐色錆が付着する（写真5）。

E. 坏身 完形、口径 12.5 cm、受部径 14.4 cm、器高 3.7 cm。焼成良好、色調灰色、胎土精良で白色粒と黒色粒と 5 mm 大の石粒を含む。立ち上がりは低く鈍く内傾し端部は丸く折込でつくられ、受部は粘土細紐を貼付けしてつまみ出して成形するので比較的鋭い。体部外面には粘土紐巻上痕がある。底部に貫通する大きなひび割れと内面二方向の仕上げナデ、外面右回転ヘラ削り、坏身 B・D より丁寧なつくりの印象がある。

F. 坏蓋 略完形、口径 13.6 cm、器高 3.9 cm。焼成良好、色調灰色、胎土精良で白色粒と黒色粒と 1 cm 大の白色石粒を含む。稜の名残を辛うじて残し、口縁端部は丸い。底部内面二方向の仕上げナデ、外面右回転ヘラ削り。口縁部に幅 6.6 cm の比較的大きな打ち欠きがある。ひび割れは無い。

F. 高坏 脚端部片、「U.IX」の紙小ラベルあり、残存高 3.0 cm。焼成良好硬質自然降灰、色調青灰色、胎土精良で白色粒と黒色粒を含む。二重脚部で端部には鋭さがあり、透し孔や外面カキ目調整など小片ながら丁寧なつくりが伝わる。蓋坏より古相を示す。

13. 土師質焼成坏身 2/3 残存、復元口径 13.4 cm、受部径 16.0 cm、器高 4.7 cm。焼成不良土師質、色調淡褐色～灰褐色～黒褐色、胎土白色粒が目立つ。他の蓋坏より一回り大きいのは、焼成不良で焼縮が少なかったからかもしれない。底部外面には粘土が残存して未調整のようにみえる。しかし、周囲には回転ヘラ削りが観察できる部分もあり、ヘラ削り後に粘土を貼り付けたとも考え



写真4 宇留毛横穴式石室墳出土遺物



写真5 D坏身に付着する赤褐色錆

られる。立ち上がりは貼付で、端部は欠けているので本来の状態は不明である。受部は斜め外方に薄くのびる。調整は器面荒れで観察しにくい、底部内面には不定方向の仕上げナデがある。

14. 坏蓋 略完形、口径 14.0 cm、器高 4.4 cm。焼成良好底部一部軟質、色調灰色で底部外面の一部は白灰色、胎土精良で白色粒と黒色粒と 3 mm 大の白色石粒や同大の石粒を含む。体部外面には粘土紐巻上痕、および稜の痕跡ともロクロ目とも判断しかねる鈍い凹線が巡り、口縁端部は丸く仕上げる。口縁部に幅 5.2 cm の打ち欠きと大きなひび割れ、底部内面に小さなひび割れがあり、仕上げナデは中央にはなく、体部寄りに 2 カ所にある。底部外面に手持ちヘラ削り、2 本線のヘラ記号がある。

土師器片 「U .2」の紙小ラベルあり。大きさは 5 cm ほど、焼成不良ポロポロ、色調暗橙褐色、胎土は白色粒などが目立ち砂っぽい。高坏脚部片だろう。

遺物帰属古墳の検討（注 1）

現在の遺跡地図等では「宇留毛横穴式石室墳」「宇留毛（小）石室古墳」ともに遺跡名としては記載がなく、遺物が出土した古墳は不明ということになる。本墳はラベル「熊本市立田山宇留毛横穴式石室墳」や遺物スケッチ「宇留毛（小）石室古墳」にあるように 1955 年（昭和 30 年）調査当時や 1956 年（昭和 31 年）のスケッチ作成当時には古墳名称が定まっていなかったようだ。

しかし、本墳の出土遺物は調査日、所在地、調査者、出土状況図、種類と数量からみて、現状では立田山南麓古墳（上）の出土遺物の可能性が高いと思われる。「立田山南麓古墳（上）」の名称がいつ付けられたか不明だが、1971 年（昭和 46 年）刊行の『北部地区報告書』の執筆編集時に本墳に付与されたことが考えられる。

さて、本墳が立田山南麓古墳（上）との推定に基づき、遺物について少し具体的にみる。乙益報文には「入口の左袖石と、西側壁にはさまれたコーナーに、須恵器の横瓶 1 個と坏の身と蓋を合計 5 個重ねてならべ」「外側に横瓶を水平に置き、その隣に坏の身と蓋と身を重ね、蓋は裏かえしに重ねていた。その隣に坏の身 2 個と蓋を重ねてならべ」とある。記述前半と後半では蓋坏の数が異なり、前半は 5 点、後半では 6 点と読める。出土図から読み取れるのは、向かって左端が平瓶 1 点、中央が下から順に坏身、坏身、坏身、坏蓋の 4 点、右端が坏身、坏蓋の 2 点の 7 点である。記述後半と図面では数は合うが、出土状況が異なる。

このように報文と図面との間に齟齬がある。また、遺物のアルファベット注記 A が平瓶、B～F の 5 点が蓋坏の計 6 点が左袖部の一括遺物とも考えたが、数が合わない。石室東壁下には「須恵器の坏残欠」が散布していたとあるので数字注記は石室内の遺物と考えたが、14 の坏蓋は略完形である。

ただ、「横瓶は全高 14.5 cm、口径 7 cm、胴径 15 cm を有し、灰青色を呈する」で、A . 平瓶は色調はやや異なるが、器高 14.9 cm、口径 6.8 cm、胴径 15.2 cm、頸部長 4.3 cm でよく合致する。さらに、D . 坏身の受部に鉄製品の赤褐色錆が付着するのは、左袖部の「その壁ぎわに鉄鏝 12 本分を束ねて斜めに突立てていた」と図もあるので、アルファベット注記は左袖部の一括遺物を示すことは考えられる。

齟齬の解消と帰属古墳の明確化には、原図の確認など更なる今後の調査が必要である。

B、宇留毛の短頸甕（写真 6）

ラベルなし。口縁部内側に「肥後熊本市黒髪町宇留毛 1955.12 月」の墨書注記あり。字体は宇留毛石室古墳出土遺物と同じである。破断面が新鮮な部分と経年の部分があり破片も不足して

いるので、元は完形品だったが工事等での出土時に割れてしまったのだろう。本品は県内では少数例であり、立田山古墳群の遺物の可能性があって、古墳群成立に関連すると思われるので紹介する。

口径 12.7 cm、頸部径 7.4 cm、胴部径 10.2 cm、注口径 1.5 ~ 1.6 cm、器高 12.0 cm、口縁部高 4.4 cm、胴部高 7.6 cm。焼成は良好堅緻で自然降灰が少しあり、軽い焼き上がり。器壁は薄い。色調青灰色、底部の一部は薄灰色。胎土精良で白色粒含み、黒色粒は含むが吹き出しはない。

頸部は短く口縁部は屈曲して外に開き、端部には面を持つ。この面は口唇端外部をつまんで成形して作り出したものである。外面にはやや鈍いが相対的ではない稜がめぐり、波状文が頸部と胴部にある。頸部には浅く細い丁寧なゆっくりとした波状文がめぐり、波状文の施文工具は幅 1.5 cm ほど、胴部波状文は幅 1 cm ほどで、施文後に上下をナデて文様を浮き出させる。胴部施文は注口部の左から始まり、一周して終わる。口縁部に 5 cm ほどの半円形の大きめの打ち欠きがある。

頸部と胴部内面に粘土紐痕、注口穿孔は波状文の施文後で、注口外面周囲に面取りはなく、工具を引き抜いた際の粘土バリが残る。底部外面仕上げは丁寧で、左回転ヘラ削り？後にケズリ単位を丁寧にナデ消す。ケズリ単位は幅広い。底部内面には棒状工具の突出し痕が顕著に残る。器形は頸部のしまりが弱く、長頸、長胴化の兆しがあり、後につながる要素がみえる。時期は TK47 型式、6 世紀初頭。産地は大阪陶邑か？出土遺跡がどこなのか、今後の検討が必要である。



写真 6 宇留毛の短頸壺

(5) 黒髪町下立田地域

C、城床古墳出土有蓋脚付短頸壺 (写真 8 奥)

底部に墨書注記「熊本市黒髪町宇留毛字城床 (立田山) 1952、3・15 ~ 20」がある。脚部を欠くが、胴部は略完形。蓋はない。破断面はすべて新しいので、元は完形品だったと思われる。口縁部は短く直立し、焼成時に蓋は被せない。最大径は肩部にある。口径 8.2 cm、胴径 20.4 cm、脚基部径 4.9 cm、現器高 17.8 cm、胴部高 16.7 cm。

焼成良好、硬質、融着片あり。内外面ともに黒色の吹き出し、火ぶくれや外面にはひび割れがある。高温焼成のためか、全体的に器面が荒れている。断面はサンドイッチ状に中心部は黒灰色である。色調は白灰色 ~ 黒灰色、内面も同様で一部は黒灰色を呈する。胎土は比較的精良で、白色粒黒色粒と 5 mm 大の石粒を含む。

胴部カキ目調整後に肩部に粗い羽状列点文を施す。内面下半は粗い同心円当て具痕、上半は強いヨコナデ調整がある。底部に擦れた部分がある。脚基部には透かし？があるようにも見受けられる。産地は宇城窯跡群か立田丘陵の窯を考えたいが、さらに検討しよう。時期は TK209 型式、7 世紀前半である。

D、常楽寺跡出土の平底瓶 (写真 7 手前)

ラベル「須恵器壺壺個、熊本市下立田 600 番地常楽寺跡の古墳？より出土という。地表下浅い所より、丘陵地上 昭和 38 年 (1963 年)、7 月 09 日 (火) 晴天」である。類例の少ない

平底器形であり、立田山古墳群近隣地出土であるので紹介する。

完形品、胴部中位より上下に割れている。破断面は新鮮で角は鋭く土砂の付着も見られないので、出土時に割れたものと思われる。口径 6.8 cm、胴径 17.2 cm、底径 11.5 cm、器高 19.1 cm、頸部長 4.8 cm、胴部高 14.3 cm。

焼成良好堅緻、よく焼き締まり重い焼き上がりで叩くと金属音がする。正位焼成、口縁部内部と肩部と内面底部に自然降灰と濃緑色の自然釉、一部褐色釉流れ、小破片融着、内外面とも黒色の吹き出し、断面はやや光沢が、部分的に内面が暗くサンドイッチ状の部分があり、小さな空隙が多くみえるが、火ぶくれはない。色調は灰色で底部外面は薄灰色。胎土精良で白色粒黒色粒石粒が入る。

器形は平底の底部から直立して立ち上がり、肩部は丸みがあり高坏脚部に似る頸部に至る。口縁部は外反し端部はつまみ出して成形する。胴部器形は厚みのある提瓶と同様。成形は底部の粘土板上に粘土紐を巻き上げて胴部をつくり、直径 8 cm ほどの開口部を残して胴部を成形して開口部を粘土板で閉塞し、形を整えて丸みを出し、さらに閉塞粘土板を穿孔して別作りの頸部を接合して製作する三段構成である。

底部は左回転ヘラ削り後に胴部全体を雑なカキ目調整。ヘラ状工具の飛鉋風のところもある。肩部に 3 条の浅沈線後に羽状列点文を施す。この列点文はなかなか洒落ていて、上が櫛歯で下がほぼ無文のヘラによるもので、工具を変えている可能性がある。

産地は後に述べる宇留毛浦山火葬墓の蔵骨器と胎土や焼成が類似しており、立田丘陵の窯か。時期は TK209 型式、7 世紀前半である。



写真 7 (手前) 常楽寺跡平底瓶
(奥) 荒尾野原 7 号墳平底瓶

平底瓶はすべて渡来系か

平底瓶はロクロの中心軸上に口頸部をおく瓶甕類と同じで、左右対称につくられる。古墳時代瓶類の中で最も一般的な提瓶は胴部のロクロ軸の直角方向に口頸部があり、平瓶は胴部ロクロ軸の斜めに口頸部をつくる。平底瓶と提瓶は同時に出現し、のちに平瓶が出現する。

本例は、荒尾野原 7 号墳の平底瓶 (MT15 型式、6 世紀前半、写真 7 奥) とは特に口頸部の製作技法が異なる。野原 7 号墳例が胴部から口頸部までやや絞りながら連続して成形するのに対し、本例は粘土板閉塞の三段構成による通有の技法でつくられ、器形だけに渡来系の残影を映す。よって、渡来系遺物として語られる「平底瓶」と称してよいのか躊躇する。他の立田山古墳群出土遺物の中にも現状では顕著な渡来系要素はみられないし、平底の須恵器は横穴出土品の中で数は多くないが目にすることができる。つつじヶ丘横穴群、宇留毛小磯橋際横穴群や北岡横穴群などにも平底の須恵器がある。ある時期以降の平底器形のものは「平底瓶」と呼称しないほうが良い気がするが、今のところ明確に区別する指標をもちあわせていない。

平底器形が増えるのは渡来系要素の土着化の一端であり、須恵器が出現当初貴重品だったもの

が、時代を経て生産が増加するにしたがって日常器になっていくのと同じように、丸底器形が多い中であって、平底器形のような渡来系要素も日常に溶け込んで一般化していくのだろう。このことについては、別稿で論じたいと思う。

E、白石古墳出土土器（写真8手前・9～12）

出土遺物の初確認は昭和35年（1960）4月25日。オリジナルラベルは7種類ある。日付順に「熊本市黒髪町下立田（立田山）農林省出張所東側尾根上古墳出土 須恵器・土師器等一括、1960（S35）、4・26（火）収、」・「熊本市黒髪町下立田村ノ上770番地（農林省林業試験場九州支場東側）東洋繊維用地内古墳1960（S35）、4・26（火）収」・箱ラベル「No.505下立田白石古墳」には「熊本市黒髪町下立田（立田山）農林省出張所東側尾根上古墳出土 須恵器・土師器等一括、1960（S35）、4・26（火）収、」・箱ラベル「No.503下立田白石古墳」・「No.504下立田白石古墳」の中には「熊本市黒髪町下立田村ノ上770/古墳（立田山）（農林省林業試験場九州支場）東側台地上所在/1960（S35）、4・27（水）」・「熊本市黒髪町下立田、農林省林業試験場九州支場 苗圃下発見土器片1箇、1960（S35）、4・27（水）/、」・「熊本市黒髪町下立田 古墳土器1960（S35）、5・15（日）A10→55、ℓ1F、熊大生、伊藤奎二氏持参来」・「熊本市黒髪町下立田古墳土器一括 桜山中生採集 収1960、5・17（火）」の4種類がある。箱ラベル「No.565下立田白石古墳」には「熊本市黒髪町下立田古墳土器一括 桜山中生採集 収1960、5・17（火）」が入っていた。

オリジナルラベルは同じ筆跡である。ラベルによると博物館に収納されたのは、初確認翌日の4月26日以降、27日、5月15日、17日の4回にわたっている。ただ、オリジナルラベルの記載に少し相違もあり、出土古墳が「東側尾根上古墳」などと個別古墳名が明示されておらず曖昧で、厳密にすべての土器が1基の古墳出土品かどうか、今後の調査検討が必要である。「宇留毛横穴式石室墳」と同じように、遺物発見当時には名称が定まっておらず、「白石古墳」の名称は『北部地区報告書』の執筆編集時に本墳に付与されたことが考えられる。

土器は水洗と接合が一部では進められていたが、土砂が付着するものも多くあったので、今回改めて水洗と接合を行った。再整理にあたっては、焼成良好で硬質の須恵器が多かったため断面をよく洗って土砂を極力除去し、接合時にゆがみが生じないようにした。また、破断面の新しい破片が多く、しかも出土が通常の発掘調査によるものではなく、未だに現地に多数の破片が採集されずに眠っていると考え、今後の調査を期待して接合方針として、接合残部が鈍角になるようにして新たな破片がはめ込めるようにする、接合面の小さな無理な接合はしない、面になるような接合に努め細長くならないようにするなどした。

なお、報文では鉄製品出土の記載があるが、現状では確認できていない。



写真8（手前）白石古墳須恵器
（奥）城床古墳有蓋脚付短頸壺

土器の概要

個体数 200 点以上。本古墳出土土器の主な特徴には大量出土、類例の少ない子持壺と大型器台が含まれる、時期幅の大きさの 3 点があり、宇土市神ノ木山古墳群と類似することがわかってきた。須恵器の器形の種類は蓋坏、有蓋高坏、無蓋高坏、甕、壺、短頸壺、短頸壺蓋、有蓋壺、提瓶、大甕、中甕、子持壺や高坏形器台などがある。土師器は小片が多いが、坏、模倣坏、高坏などがあり、赤色塗彩されたものも含まれる。

出土数が多いので、全体的な概要を記す。時期毎にでもみていけばよいが、今回は果たせなかった。須恵器の焼成は良好堅緻なものが多いが、不良軟質のものも一定数ある。甕には肩部に窯壁片が付着するものもある。色調は白灰色～黒灰色まで多種類ある。胎土は白色粒を含むものが多く種類も多い。技法は蓋坏に関して、底部回転ヘラ削りと手持ちヘラ削りがある。ヘラ記号を持つものがある。土師器の焼成は軟質である。

時期は 6 世紀前半から半ばの MT15～TK10 型式あたりがはじまりで、6 世紀後半から 7 世紀の TK43～TK 209 型式が主体、7 世紀前半の TK 217 型式まで続く。須恵器の産地は宇城窯跡群と推定され、特にはじまり頃の蓋坏が宇城窯跡群産（写真 9）であり、しばらくは供給が続いていたことが推定された意義は大きい。後半以降には立田丘陵の窯の製品も入るようだ。なお、宇城窯跡群産須恵器については、中原 2003 にまとめているので参照いただきたい。

子持壺と高坏形器台（写真 10・11）

本墳からは小規模古墳には珍しい装飾付須恵器の一種である子持壺の子壺と大型の高坏形器台が出土した。子持壺の子壺は破片が 4 点あるが接合はしない（写真 10）。手捏ね状の雑なつくりで、粘土塊に口縁部分を貼り付け、外形だけはかろうじて広口壺形を呈する。元は 4 カ所に貼り付けられていたと思われる、本



写真 9 白石古墳初葬時の宇城産須恵器蓋坏



写真 10 白石古墳子持壺の子壺
（右）胎土比較資料 中ノ城古墳高坏



写真 11 子持壺（上）端ノ城古墳（下）白石古墳

来の器形は接合する本体の壺部が見当たらないので不明だが、子壺接合面に残る壺胴部の綾杉文とカキ目調整のスタンプからみて、長頸壺を想定したい。接合部中央が凹むのが気になる。焼成は良好硬質で重く、破断面は鋭い。色調は濃灰色～黒灰色。胎土は白色石粒が多く、ざらざらである。

熊本県内では子持壺は玉名郡和水町の清原古墳群の京塚古墳と八代郡氷川町の野津古墳群の端ノ城古墳で出土している（写真 11）。この2カ所の古墳群はいずれも国指定史跡であり、前方後円墳を含む熊本における北部と南部の最有力の古墳群である。他県では、宮崎市蓮ヶ池横穴群第26号横穴の子壺付高坏出土例などがあるので、小規模墳からの出土が全くないわけではないが、希少例であり新知見となった。

時期は京塚古墳例はTK47型式、野津端ノ城古墳の脚付長頸子持壺は頸部が長く壺部が小さく丁寧に波状文を描き、子壺もちゃんと壺で施文もあるところからみてTK43型式だが、本墳例は文様がなく雑なつくりなので後出するTK209型式以降だろう。

高坏形器台は、坏部片と脚部片が計6点ある（写真 12）。大型品で想定される大きさに比して破片は少ない。破片はすべてが同一個体とみたが、どうだろうか。全体に器壁は厚い。坏部片には口縁部と底部片がある。口縁部片は分厚く短く外反する端部の上面にカキ目工具による羽状列点文がめぐり、器壁の薄い溶着片も付くが装飾の子器ではない。外面には雑な波状文が幅2cmで口縁屈曲部にぶつけながら施文される。底部片の器壁は他に比べて薄く、脚部との接合部が観察できる。脚部は筒状部と脚端部に近い破片もあり、浅く鈍いがしっかりと二条の沈線で区画された中に、坏部と同じような波状文を幅2cmほどを一単位として雑にめぐらせ、後に長方形透しを四方にあける。内面には粘土紐積み上げ痕があり、ナデ調整する。

焼成は良好ながら、器壁の厚みの割にはやや軽い焼き上がり、黒色発泡は少なく自然降灰と自然釉の剥落がある。色調は外面灰色～黒灰色、内面は灰色～青灰色。胎土は白色粒と黒色粒を含むがあまり目立たない。小さな隙間がある。時期は口縁部に羽状列点文がめぐり、雑とはいえ区画線や波状文が施文される所からみてTK43型式が考えられる。

焼成や色調と胎土が類似する高坏形器台は野津古墳群に数多くあり（写真 13）、物見櫓古墳、端ノ城古墳、中ノ城古墳と大野窟古墳、宇土市神ノ木山古墳群から、筒形器台は野津姫ノ城古墳から出土している。生産量の少ない器台に関しては野津古墳群、神ノ木山古墳群、本墳が宇城窯跡群から供給されたことが想定される。



写真 12 白石古墳高坏形器台



写真 13 野津古墳群等の高坏形器台
（左端と中下・端ノ城古墳、中2点と右下・中ノ城古墳、右上・大野窟古墳）

3、立田丘陵の窯跡 —参考として—

立田山古墳群や周辺の横穴群出土須恵器の中には、立田丘陵の窯で焼成されたとみられる須恵器が含まれている。立田丘陵では古墳時代の窯跡は現在のところ発見されていないが、古代の須恵器窯跡（長蓮寺窯跡、堂ノ前屋敷窯跡）は立田山古墳群から北東方向の直線で概ね2 kmほどの場所に所在する（図2）。立田丘陵の古代の窯跡は付近が製陶粘土採掘や窯つくりに適した土質であることを示し、豊富な森林資源は窯業生産の必須要件であり、加えて生産品を出荷するのに都合の良い白川水運もある。立田丘陵は須恵器生産における粘土、燃料、運搬の三条件を備えた適地であったことが推定される。製鉄に必要な炭も豊富な森林資源がもとであり、鉄原料は白川を通して、前代以来の阿蘇地域からもたらされたのだろう。

同じ丘陵で焼成された古墳時代の須恵器と古代の須恵器は胎土が類似すると考えられるので、参考として窯跡関連記述を『北部地区報告書』から引用し、博物館が所蔵する立田丘陵に所在する古代の須恵器窯跡資料などの概要を紹介する。

II、各説編 3.立田丘陵地区 (3) 竜田町陣内地域

① 長蓮寺窯跡 熊本市竜田町陣内長蓮寺

宝積寺から緑が丘に通じる道路の東、御野立所の山の西斜面にはねじれ曲がったり、半焼けであったりする物を含めて多量の須恵器が出土する。おそらくこの斜面を開墾した時にはおびただしい土器が出たと思われるが調査されていないため、分布範囲も窯の数や形も明らかでない。東部中学校に所蔵されている緑が丘出土と称する須恵器の中にも窯跡から出たと思われる物が含まれており、あるいはそれも同一群の窯跡出土のものかもしれない。出土している須恵器の器形等も全体的に調査整理されていないが、甕、高坏等が見られる。

(S 39 (1964) .6 調査) (上野)

(4) 黒髪町宇留毛地域

⑧宇留毛浦山火葬墓には「(前略)立田山丘陵の各地点で、須恵器の窯址が発見されていることを思うと、この蔵骨器は立田山須恵器窯群の作品ではないかと思われる。その時代は奈良末～平安初期というところであろうか。(S 37 (1962) .3. 9 調査) (東)」との記載があり、既知の須恵器窯跡のほかにも窯跡の存在が推定されている。

博物館所蔵資料

博物館には長蓮寺窯跡と堂ノ前屋敷窯跡での採集品が所蔵されている。長蓮寺窯跡は「熊本市遺跡地図」には「迫ノ上遺跡群」に含まれ、窯跡記号で場所が示されている。新熊本市史史料編第一巻考古資料には「迫ノ上遺跡群(長蓮寺窯跡)」と同じ丘陵の「迫ノ上遺跡群(堂ノ前屋敷窯跡)」の2か所の窯跡の記載がある。また、宇留毛浦山火葬墓の蔵骨器も所蔵されている。

長蓮寺窯跡採集品 (写真 14・15)

ラベルに「熊本県熊本市竜田町御野立所南側丘陵(伝長蓮寺址)須恵器窯址発見土器片一括 1961 (S 36)、3・30 (木)、調査採集」の記載がある。点数は小片まで含めると、須恵器14点、土師器10点、礫2点の計26点である。須恵器はすべて甕片で大甕と中甕、土師器は坏と鍋、礫は加工痕の無い安山岩の自然礫である。

土師器もあるので、すべてが窯跡採集品かどうか疑問が残る。これらの内、窯跡採集品の特徴のある大甕について概要を記す。これを長蓮寺Aとする。3片あり、同一個体で大きさ10 cm、器厚1.7 cm程度。焼成は良好でかなり硬質の焼き上がり、断面にはやや光沢があり窯跡品特有の

爛れたような部分も観察される。表面に薄灰色や黒色の吹き出しがあり、外面に自然降灰と自然釉の垂下、内面にも自然降灰。色調濃灰色、胎土には白色石粒が多く目立つ。調整は外面浅い格子タタキ、内面は浅い同心円当具痕がある。ズシリと重量がある。

これ以外の甕片は、いずれも焼成良好硬質、色調は薄灰色、灰色、濃灰色、黒灰色、橙灰色、黒赤灰色がある。胎土は細かく白色石粒や黒色粒を含まないもの、細かいが黒色粒を含むもの、比較的黒色粒が目立つものなどがある。調整は外面粗い格子タタキ、内面同心円当具痕がある。荒尾窯跡群産かと思えるものもある。

他にも、ラベル「河喜多義忠氏コレクション 旧箱札・2種、〈陣内一前原、宮本実氏畑出土〉〈長蓮寺釜（窯）製須恵器宮本実氏ブドウ畑出土〉」の資料がある。須恵器9点、土師器5点の計14点である。須恵器は高台坏1点と他は甕片で大甕と中甕、土師器は甑（把手）と鍋である。ラベルのとおり、2か所の遺物が混在しているのが極めて残念である。

河喜多コレクションの中で、明らかに窯跡資料と推定されるものはないが、それと思しき須恵器甕の概要を記す。これを長蓮寺Bとする。同一個体片が6点あり、大きさ15～7cm、器厚1.6cm程度。焼成良好だが硬質と軟質の部分があり、焼きムラや自然降灰がある。色調は外面黒灰色～灰色～薄灰色～赤灰色、内面は灰褐色～赤灰色。胎土は小白色石粒が多く目立ち砂っぽい感じである。調整は外面やや深く粗い平行タタキ、内面は浅い同心円文と格子当具痕がある。焼成がもっと焼き締まっていれば、長蓮寺Aの濃灰色の3片と同様になっていたと想像される。内面の当具痕が浅いのはAもBも共通し、時期は甕の調整痕からみて、主体は8～9世紀だろう。土師器も同様の時期である。

堂ノ前屋敷窯跡採集品（写真16）

ラベルに「熊本市竜田町上立田堂ノ前屋敷須恵器窯址発見須恵器片等一括 1961（S36）、3・6（月）～3・30～／、」の記載がある。土師器は含まれていないので、窯跡資料の可能性は高い。総数120点余り、全体に小片が多く、器形の種類には脚付壺、端部折蓋、坏・皿・高台壺類、



写真14 長蓮寺窯跡採集品（長蓮寺A）



写真15 同窯跡採集品（長蓮寺B）



写真16 堂ノ前屋敷窯跡採集品

瓶類、甕があり、6割ほどが甕である。器形が分かり数が多いのは脚付壺と端部折蓋と甕口縁部である。脚付壺は脚部に壺部との接合のための明瞭な渦巻き沈線がある。消費地遺跡出土品との比較によって、本窯の製品と判断されるようになると思われる。甕の中には発泡して黒色の吹き出しが多くあり、重量が軽いものもある。瓶胴部には4本の波状文が入り、断面は赤灰色である。

総じて焼成と色調は良好堅緻～不良灰色軟質、橙灰色の土師器状のものまでさまざまで、胎土は比較的共通しており、細かくて小白色石粒と黒色粒が多い。

近隣のその他の資料

これら以外では、窯跡資料ではないが他の河喜多義忠氏コレクションには長蓮寺裏山出土品は須恵器甕片6点があり、上立田狸坂出土（一本松跡下）には須恵器3点でTK209型式頃の蓋坏と甕片がある。いずれも古墳時代のもので、付近に古墳が所在した可能性を示している。

宇留毛浦山火葬墓の蔵骨器

遺物注記「熊本市黒髪町宇留毛ウルク浦山ウラヤマ 196 2. 2・10 頃出土（1962. 3・9 寄贈）米村竹助氏」がある。完形品で縦に二つに割れている。口径 15.8 cm、器高 17.4 cm、最大径は肩部にあり径 18.2 cm である。器形は短く緩く外反する口縁部からやや尖底気味の底部に向かう短椎実形である。

焼成は良好硬質堅緻、よく焼き締まり重い焼き上がりで叩くと金属音がする。器厚は概ね 1 cm ほどあり、ズシリと重い。外面にはいく筋かの亀裂があり、焼台なのか坏類片の融着もある。正位焼成、口縁部から肩部にかけて自然降灰と深緑色の自然釉、内面には小黒色吹き出しが目立ち、内底部にも降灰と自然釉と窯体小片が広く付着する。断面に光沢があり、サンドイッチ状に内外面が黒く中が灰色の部分が多い。断面には小さな空隙が多くあるが、火ぶくれはない。色調は灰色、胎土は細かく白色石粒を少し含む。

成形は口縁部分の貼り付けで、断面で確認できる。調整は外面はやや深く粗い平行タタキが主体で底部には一部にタタキ後の回転ヘラ削りがあり、内面には粘土紐巻上痕と浅い同心円文が残る。外面タタキ目の状況は、長蓮寺Bの甕と類似する。

4、他古墳との比較検討

白石古墳出土品からみた状況をもとに、他古墳の出土須恵器と比較検討して類似点と相違点を探り、立田山古墳群の理解の一助とする。

A、八代郡氷川町野津古墳群、大野窟古墳

野津古墳群は4基の大型の前方後円墳からなり、北から順に姫ノ城古墳 115 m、中ノ城古墳 117 m、端ノ城古墳 81 m、やや西に物見櫓古墳 62 m がある。大野窟古墳は野津古墳群の北方 1.5 km にあり、墳長 123 m に復元された地域最大規模の前方後円墳である。氷川流域の八代海に面する一帯、特に右岸の丘陵地帯には多くの古墳が築造され、県内でも有数の有力古墳密集地帯である。野津古墳群と大野窟古墳はいずれも後期古墳で、被葬者は熊本地方においてこの時期最も強い勢力を誇った火の君一族と考えられている。

白石古墳とは古墳規模の違いが大きく、比較検討には不向きかもしれないが、出土須恵器には類似点が多い。出土須恵器は多くが宇城窯跡群産で、窯跡は古墳群から北に 10 km ほどしか離れておらず、運搬に海路を使えば容易に運べる。開窯は野津古墳群をはじめとした氷川流域の有力な後期古墳の造営開始が契機で、窯の主体者も古墳群の被葬者と同一だろう。宇城窯跡群は火の君一族の御用窯と言える。

子持壺と器台 (写真 11～13)

出土量が多いので、白石古墳と共通する特徴的な子持壺と器台に絞る。端ノ城古墳の脚付長頸子持壺(写真 11 上)は、大型品で器壁も厚く器台と同厚で、葬送儀礼のための製品である。焼成良好、自然降灰と自然釉があり、色調は外面が部分的に黒灰色、内面は薄灰色を呈する、胎土は黒色粒を含むなど、よく類似する。時期は TK43 型式である。

高坏形器台(写真 12・13)も注記がなければ、物見櫓古墳の薄手の作りで焼成が硬質のもの以外は、どの古墳のものか迷うほどよく類似する。脚部には上半の径がほぼ同一で筒状を呈するものと坏部に向かって細くなるものの 2 種類がある。細くなるタイプは大野窟古墳と神ノ木山古墳群に例があり、内面に絞り目があるので、通常の高坏脚部と同じように絞り成形している。福岡の八女古墳群の高坏形器台脚部は中位がくびれるものと坏部に向かって細くなるタイプがある。脚部上半が筒状のものは、近畿地方や四国地方など各地にあるので、宇城窯跡群産の特徴の一つとまでは言えないかもしれないが、他の属性とからめれば判断の指標にはなるだろう。

また、野津古墳群の高坏形器台をみると、作り方に 2 種類あることに気が付く。一つは通常の高坏と同様に脚部の上に別作りの坏部を接合する方法で、器形は坏部と脚部の境が明確でメリハリのある形を呈する。時期が TK43 型式ころまではこの方法が主体だったと思われる。物見櫓古墳、端ノ城古墳、中ノ城古墳にある。その後、TK 209 型式以降になると、脚部の上部を朝顔形に広げ坏部にする部分まで一体成形した後に、屈曲部を粘土板で塞いで底部とし、あたかも高坏形のように見せるものが登場したようだ。器形は締まりないメリハリのない形を呈する。この方法は生産の省力化の一端であり、中ノ城古墳にみられる(今田 1999 第 51 図 18)。ちょうど TK 209～TK 217 型式の宇城窯跡群の 7～8 期の有蓋高坏も坏部と脚部の境が締まりのない器形になるので、よく呼応している。あとは、数の少ない筒形器台と高坏形器台の関係、筒形器台と高坏形器台が合体したような器形の登場など、器台をめぐる諸問題は種々興味が尽きないので、後考に期待しよう。

B、宇土市神ノ木山古墳群

工事に伴う不時発見のため、墳形、規模などは不明で、主体部は横穴式石室と考えられている。周辺には発見された 2 基の古墳以外にも、数カ所で須恵器が数多く出土する所があり、破壊された古墳が他にも所在する可能性が高いとされている。立地は丘陵の頂部付近にあり、標高約 70 m である。

遺物は 1 号墳の周溝と思しき溝から大量の須恵器や装身具、鉄製品その他が出土した。須恵器は 400 点ほどもあり、1 カ所の古墳からのこのような大量出土は稀である。時期は 6 世紀前半から半ばの MT15～TK10 型式期あたりがはじまりで、6 世紀後半から 7 世紀の TK43～TK 209 型式期が主体、7 世紀前半から半ばの TK 217～46 型式期まで続く。

須恵器の器形の種類は蓋坏、有蓋高坏、無蓋高坏、甕、壺、短頸壺、広口壺、長頸壺、提瓶、平瓶、横瓶、脚付壺、甕、大甕、中甕、台付把手付鉢などがあり、他には小規模古墳の出土例は珍しい大型の高坏形器台や勾玉形の装飾が付く壺、鈴脚が目を引く。焼成、色調、胎土から産地は多くが宇城窯跡群と推定され、蓋坏にはヘラ記号が少なく宇城窯跡群の特徴の一つと考えられている。また、宇城地域の地域性を示すものとして、須恵器における高坏の割合が非常に多いことも指摘されている(木村 2002)。土師器の器形の種類には坏、模倣坏、壺、高坏、壺などがある。

類似点と相違点

白石古墳との類似点としては、土器の大量出土、高坏形器台や装飾のある土器、時期幅の長さ、宇城窯跡群産須恵器の使用、および最も肝要なる古墳の立地がある。相違点は蓋坏と高坏の比率、蓋坏のヘラ記号の多寡がある。

類似点は遺跡が同じ性格を持つことを示し、相違点は地域性を示す。相違点の地域性とは、各地域、各古墳によって選択的に須恵器を仕入れていたことをあらわし、それぞれの地域や古墳の葬送儀礼祭祀や他の祭祀などにおける具体的な土器の使い方と仕入先に左右される。古墳の主体者＝地域の相違に直結するのである。

類似点のうち土器の大量出土については、県内では他に荒尾野原7号墳がある。250点以上の土器が出土し、調査報告者の坂本経堯は付近の古墳の代表として祭祀を執り行ったためと考えた。数百個体にものぼる大量の須恵器を埋納する行為には、古墳埋葬に伴う葬送儀礼ばかりでなく、他の祭祀行為での使用もあったと考えられ、出土量は祭祀規模及び期間を示し、土器が多ければ多いほど祭祀の期間も長く、規模が大きかったと思われる。遺物を古墳規模に見合わないほど大量に持つ古墳は、古墳と祭祀遺跡の両方の性格を併せ持つ遺跡と推定される。その性格を検討する際に重要なのは、遺跡の立地である。

高坏形器台などの大型器台や装飾付須恵器は生産量も少なく、出土地も限られる。少数品を共通して持つ複数の古墳には、強いつながりが想定できる。時期幅の長さはその古墳での祭祀の実施期間と同一であり、祭祀規模に直結する。この点では神ノ木山古墳群一帯の方が、より大規模かつ長期間にわたる祭祀場所だったと考えられる。

宇城窯跡群産須恵器の、産地の同一性を示す最も特徴的な2点の無蓋高坏をあげる（写真17）。これらの須恵器は非常に類似性が高く、同産地、同窯、同工人品の可能性が高い。1点目は神ノ木山古墳群例で中原・木村2002の第4図104（写真手前）である。2点目は白石古墳例（写真奥）で、略完形、つくりは丁寧ながら、全体に焼き歪みがあり口縁部に顕著である。口径13.7～11.6 cm、底径10.8 cm、器高14.7～13.2 cm。坏部は丸みのある古式な無蓋高坏の形態で、やや外方にのびる口縁は端部を丸く仕上げ、口縁部と体部との境の稜は強調されており、体部は脚部貼付後に丁寧にカキ目調整する。脚部は中位に二条の沈線をまわし、その上下に交互に長方形の二方透しを入れ、逆位にして上透しを刀子であけるととき右側を強く引く癖がある。この癖は神ノ木山古墳群例にもみられる。脚端部の上端は手指でつまみ出し、下端は突帯状に作り出す。内面には絞り目が観察できる。焼成は良好硬質でよく焼き締まる、正位焼成、外表面のほぼ全体に自然降灰、軽く叩くと乾いた金属音がする。色調は白灰色～黄灰色、胎土は精良できめ細かく、黒色粒を含み一部は発泡している。古墳の立地については後で述べる。



写真17 無蓋高坏（手前・神ノ木山古墳、奥・白石古墳）

5、古墳の立地と性格

A、宇土市神ノ木山古墳群

丘陵の頂部付近の標高約 70 m にあり、有明海が一望できる。有明海は様々な物資や情報が行きかう重要な主要海上交通路であり、その立地の重要性については、宇土市の高木恭二氏は以前から指摘していた。これを受けて、中原 2002 では「神ノ木山古墳群は入江状になった地形の最奥部かつ最高部に立地し、眼下に緑川、浜戸川河口を見下ろし、有明海もその視野に入る」「この場所は単なる古墳群としてばかりでなく、航海の安全を祈願する場所、灯台、あるいは眼下に船着場、港的な施設が存在した可能性」を示した。様々な祭祀がこの場所で執り行われていたと考えたのである。

神ノ木山古墳群では祭祀が 6 世紀初めごろから始められていたことを考えると、一般的な航海の安全を祈願するばかりでなく、開始の契機はこの地域の支配者の最重要かつ危険な博打のような一大事＝大和地方などへの石棺輸送が深くかかわっていたと考えられる。それはおそらくは、生死をかけるほどの必死なものだったのだろう。それが石棺輸送が行われなくなった後も、重要な祭祀場所として受け継がれていったと思われる。終期は TK217～TK46・48 型式、ほぼ 7 世紀末で、古墳時代の幕が下りると軌を一にして静かにその役目を終えたようだ。

B、立田山古墳群（図 2）

立田山古墳群は高塚の古墳と横穴群で構成される。この 2 種類の古墳の立地には明確な差異が認められる。高塚の古墳（以下古墳という）は丘上に、横穴群は古墳よりも低位の崖面に所在することは全国的に共通することで、この原則からはずれることはないが、本古墳群の立地と分布を個別にみていくと興味深いことが浮かんでくる。白川中流域は大きく蛇行する所が多く、丘陵や台地と河川の間には平地がある場所がある。古墳と横穴群の分布境は立田山墓地と熊本大学職員小宿舎がある東南にのびる舌状丘陵（立田山墓地丘陵）で、ここを境に南西一帯に古墳、北東一帯に横穴群が分布する。

古墳の分布は A～D の 4 支群に分かれる。A 支群・長薫寺古墳は 1 基のみだが、標高 30 m ほどの丘陵東南端にあり、東側平地との標高差はあまりなく現在の川岸からは 200 m と近い距離に位置する。本墳だけが横穴群分布域にあり、他の古墳とは立地と場所を異にする。

B 支群・宇留毛神社古墳（東）と宇留毛神社古墳（西）は標高 40～50 m の斜面にあって、右手に南西方向にのびる舌状丘陵の先端に五高の森がある丘陵（五高の森丘陵）と左手に立田山墓地丘陵に抱かれる中央最深部で真南を向き、南側平地を見下ろし比高差は 30 m ほどである。白川が近くによく見える。

C 支群・立田山南麓古墳（上）と立田山南麓古墳（下）は標高 60 m ほどの斜面の谷奥にあって、左手の五高の森丘陵と右手の下立田神社のある南東にのびる舌状丘陵（下立田神社丘陵）の間の貯水池のある細い谷地越しに桜山中学校方面がよく見える。南西側平地を見下ろし比高差は 35 m ほどである。

D 支群・城床古墳群と白石古墳は標高 60 m ほどの場所に、狭長で平坦面を持たない下立田神社丘陵の地形にあわせて一列に並んで立地している。南西には白川右岸の黒髪二丁目の熊本大学、子飼町の町並みや白川がよく見える。比高差は 40 m ほどである。この白川右岸は古代の西海道の渡河地点である。古墳時代でも同場所が主要道の通る陸路と水路の要衝であったと考えられ、それが古代になって西海道として引き継がれ整備が進められたことは十分に考えられる。

横穴群のうち、浦山第 1 横穴群と同第 2 横穴群は、古墳分布域裏の立田山墓地丘陵の北に横た

わる、深く細い谷沿いにおいて見えにくい場所に立地し、宇留毛小礮橋際横穴群とつつじが丘横穴群は同丘陵の先端、女瀬平横穴群と長薫寺横穴群はさらに北奥にある。横穴群は全体として、狭い場所に押し込められた感じがある。

古墳と横穴群の分布境である立田山墓地丘陵の先端は、白川が西に蛇行して丘陵と接する所で(写真18)、ここから北には横穴群が存在するが、南には横穴群は存在しない。この丘陵と河川がせめぎ合う人が行き来するには細く狭い地峡は関門であり、ある種の精神的な境界でもあったと思われ、古墳被葬者と横穴群被葬者の明確な差と古墳と横穴の本質的相違も表している。白川右岸と坪井川に挟まれた一帯を見下ろす見晴らしの良い丘陵上に高塚の古墳があり、地続きながら奥まった場所の山裾の崖面に横穴群がある。この点は重要である。古墳は板楠1998の言う居住地から見えるのに、横穴群は見えない、のだ。



写真18 左が立田山墓地丘陵の先端、
右は白川(南より)

C、立地と性格の共通性

以上みたように、神ノ木山古墳群と立田山古墳群の白石古墳は立地が共通し、その立地から推測される遺跡の性格も共通すると思われる。前者は70mの丘陵上から有明海と緑川や浜戸川の河口を、後者は60mの丘陵上から白川水運と南北主要陸路の結節点を眼下に望む。両古墳とも流通の重要拠点を望む高所にあり、古墳の主体者＝地域に与えられた使命と役割を果たすための場所であった。古墳祭祀だけではなく、航海や輸送の安全を祈願しあるいは軍事拠点としての場所であろう。軍事において、高所の確保は必須の要件である。

海を抱える神ノ木山古墳群一帯が、祭祀規模はより大規模で、交通祭祀ネットワークの中心的役割を担っており、立田山古墳群はその一部を形成していた。木村2009が指摘するように、他の海上交通、陸上交通の要衝を望む高所にも、両古墳のように須恵器を大量埋蔵する遺跡が存在する可能性は高い。

6、立田山古墳群の位置付け―須恵器と立地と文献からみえてきたこと― 状況の整理

須恵器については、立田山古墳群出土の須恵器の時期が従前の見解より古く、6世紀前半までさかのぼる事や時期幅の広さ、白石古墳での大量出土、有力古墳と同等の器台や装飾付須恵器など希少品の存在、宇城窯跡群産品、野津古墳群との関係が、立地では立田山の古墳はいずれも白川とその両岸の平地を意識し、眼下には後につながる主要道があり交通の要衝であったろうこと、須恵器と立地では宇土市の神ノ木山古墳群と密接に関係し、交通祭祀ネットワークの一部を構成していたことなどがみえてきた。

文献では板楠は1998「建部」の項で、白川右岸と坪井川左岸の間の「立田山西南麓の現黒髪一・二丁目・子飼本町・薬園町・坪井四丁目一帯は、中・近世において「武部」「竹部」「建部」と記されており、この地名は六世紀代に大和朝廷の軍事的部民として設定された、建部一族の居住地

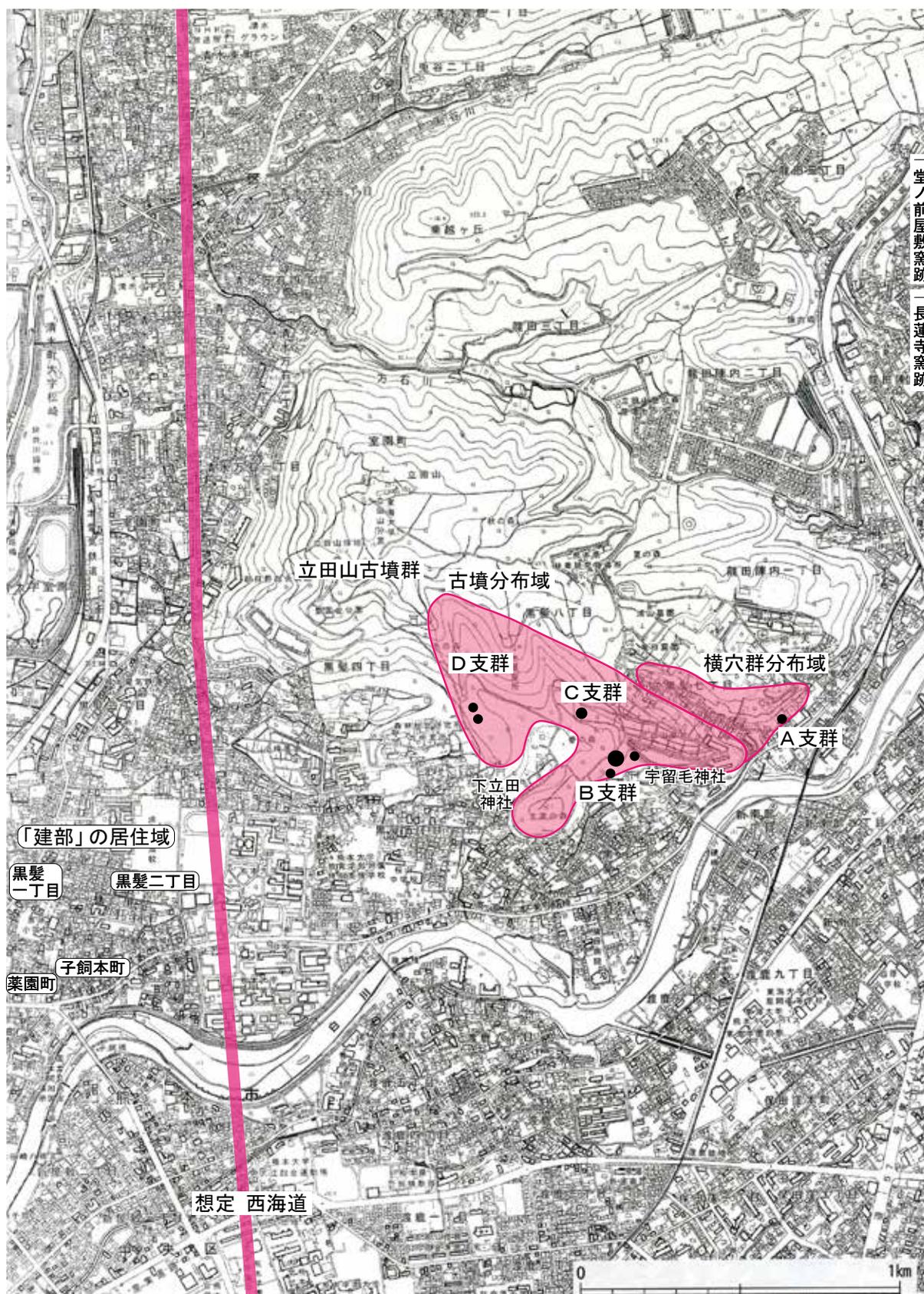


図2 立田山古墳群位置図

に因むものと思われる。」としている。西海道などの古代官道は7世紀後半から8世紀にかけて建設されており、「交通・軍事の要衝地に配された、在地の有力な豪族が率いた」のが、大王家と関係の深い部民「建部（たけべ）」であり、全国に分布する。肥後では「律令制下の飽田郡の郡司が代々建部君（公）であり、大化前代よりの有力者であった」としている。

板楠が示したのちの飽田郡に含まれる関連深い3か所の古墳群—千金甲古墳群や檜崎山古墳群などの金峰山南麓の古墳群・万日山古墳・井芹川と坪井川流域の横穴群や装飾古墳の稲荷山古墳—には、立田山古墳群は含まれていないが、今後は検討に含めるべきだろう。また、井芹川と坪井川中流域から下流域にかけての古墳文化の共通点は、装飾古墳と武器武具を持つ武人的性格の被葬者たちであり、稲荷山古墳の被葬者は「大和朝廷の支配下に入り、「建部」を率いるリーダーとして、「建部名」を名乗ることを許された」豪族と考える。古城横穴群の被葬者は建部一族の下で、鉄製武器や農具生産に従事した鍛冶技術を持つ配下の集団と考えている。

出自と成立

熊本平野北縁の古墳のうち立田山古墳群は、金峰山周辺古墳群などとは立地を異にしており、異なる出自集団が考えられる。（図1）熊本平野北縁地域に前方後円墳が所在しないのは、この地域に有力者がいなかったためであり、他地域から進出する余地があったことを意味する。

立田山古墳群の白石古墳は初葬から宇城窯跡群産の須恵器を使用し、かつ本稿で検討してきたように宇城地域の古墳や氷川流域の古墳とも繋がっていたことがあきらかになりつつあり、当該地域との強い関連がうかがわれる。こうした状況をみると、出自は宇城地域から移住した集団であり、この後ろ盾あるいは派遣元としては中期以降畿内の大王墓に石棺を貢納することによって得られた大和朝廷と強いつながりを持つ宇土半島基部の勢力が想定できる。中原2007では天草式製塩土器を持つ県北部の古墳時代後期集落は、大和朝廷との強力な関係を背景力として県央の宇城地域からの移住によって成立し、地域流通網を担う目的で交通の要衝に集落を構えたと考えた。また、文献でも板楠1998「船山古墳の大刀銘によって、火国の豪族達と雄略朝との間にすでに統属関係ができていたことが実証できる」とある。

古墳群の成立は宇留毛の短頸甕からみてTK47型式6世紀の初頭には何らかの萌芽があったと思われる。この頃、中央では継体大王が即位し、筑紫では「磐井の乱」が起こっている。宇土半島では中肥後型阿蘇石石棺が大和地方の主要古墳の初葬に採用され、大王墓級の古墳にも持ち込まれている。熊本でも神ノ木山古墳群や野津古墳群物見櫓古墳の造営が始まり、大きな時代のうねりが立田山にも到達し始めていた頃である。立田山古墳群の成立は、宇城地域有力者あるいは宇城窯跡群を支配下に置く火の君一族の勢力拡大の一環としてとらえることもできよう。

その被葬者像

板楠1998に導かれて、立田山古墳群の被葬者像を考える。立田山古墳群は、中・近世では「建部」等と記され、6世紀代には建部一族の居住地と推定された白川右岸と坪井川左岸に挟まれた一帯を見下ろす丘陵上に高塚の古墳が、居住域からは見えないが地続きの白川右岸崖面に横穴群がある。文献にあらわれた氏族と考古学で推定される被葬者像が、ぼんやりとしていた画像がポイントが合うように次第に重なり合って、関連深く存在することがわかってきた。

つまり、立田山古墳群の被葬者は後に「建部」と呼ばれるようになる一族で、宇城地域をルーツに持ち、その人物たちは「建部」の本務である交通の要衝地＝軍事拠点の支配者であった。主要陸路と白川という大河川の主要水路の結節点、四通八達の地を管轄下においていたのである。

これらの人々は「建部」の本家にあたるといえるかもしれない。ちなみに、西海道のルート設定にあたっては、立田山古墳群の被葬者が掌握していた主要陸路を踏襲した可能性がある。

担った役割としてはハード面では、白川水運と南北陸路の交点の要衝管理、その他の複数の陸路や水路の管理、人馬の中継所（後の駅家）関連施設の建物設置や河港建設と整備管理などがあり、一方では交易を主体的におこない、その円滑な遂行と行路上の安全を祈願する祭祀を執り行い、交通交易従事者たちの安寧をもたらすソフト面での働き、その他に白川中流域の再開発による農業生産、立田山の粘土や豊富な森林資源と白川水運を利用しての須恵器生産や炭生産あるいは鉄器生産に従事した集団と推定できる。こうしたハードソフト両面での幅の広い多種多様かつ多くの働きにより力をつけた結果、立田山古墳群の被葬者は大和朝廷の熊本における「建部」の一族として組み込まれていったと考えられる。

おわりに

立田山古墳群は熊本における古墳時代から律令時代に変わりゆく過渡期と、それに伴う人の移動や地域間ネットワークの状況を明らかにできる重要な古墳群である。

本稿は熊本博物館考古学専門講座で講座生の方々と一緒に、令和2年（2020年）1月16日に立田山古墳群を踏査したことが基になっている（写真19～23）。この時に各古墳からの眺望を主眼として、古墳の立地を考えながら巡ったことが本稿には大きく生かされている。講座生の方々にはそれぞれの場所で種々考えるヒントをいただいた。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

今後の課題としては、消滅とされた古墳探し、白石古墳等の発掘調査、立田山のどこかで古墳時代須恵器窯や炭窯、鉄生産遺跡あるいは古墳出土遺物の中の天草式製塩土器、未知の前方後円墳や装飾古墳を探し出すことなどがある。立田山古墳群の検討は緒に就いたばかりであり、意義深い調査フィールドが身近にあることを肝に銘じておきたい。

注1

熊本大学文学部考古学研究室から『考古学研究室報告』第56集 立田山南麓古墳（上）調査報告1 宇留毛小積橋際横穴群出土遺物報告 2021 をご恵送いただいた。感謝申し上げます。この報告の中の立田山南麓古墳（上）調査報告1に今回紹介した宇留毛横穴式石室墳出土遺物についての記述があった。P18「今回、その所在を確認したところ、立田山南麓古墳（上）から出土した遺物は熊本市立熊本博物館に「宇留毛横穴式石室墳」出土品として収蔵されていることが判明した」、P28「熊本市立熊本博物館の企画展示に宇留毛横穴式石室墳出土とされる遺物が展示され、その内容が『熊本市北部地区文化財調査報告書』に記された出土遺物に酷似していることから、それら展示品は立田山南麓古墳（上）出土遺物である可能性が極めて高いと判断できる」、P29「立田山南麓古墳（上）の遺物は熊本市立熊本博物館にて保管されている」とある。

しかし残念ながら、熊本博物館には「立田山南麓古墳（上）」出土遺物は保管されておらず、あるのは「宇留毛横穴式石室墳」出土遺物である。当該研究室報告では「立田山南麓古墳（上）」と「宇留毛横穴式石室墳」が何ら詳細な検討もされずに、あたかも同一古墳であるかのように安易に記述されている。可能性は高いがあくまでまだ可能性の段階であり、可能性と事実を混同しての記述は混乱を招くだけである。早急な訂正が必要である。



写真 19 宇留毛神社古墳群



写真 20 立田山古墳群踏査 講座生の方々
立田山南麓古墳にて



写真 21 城床古墳か？



写真 22 白石古墳か？

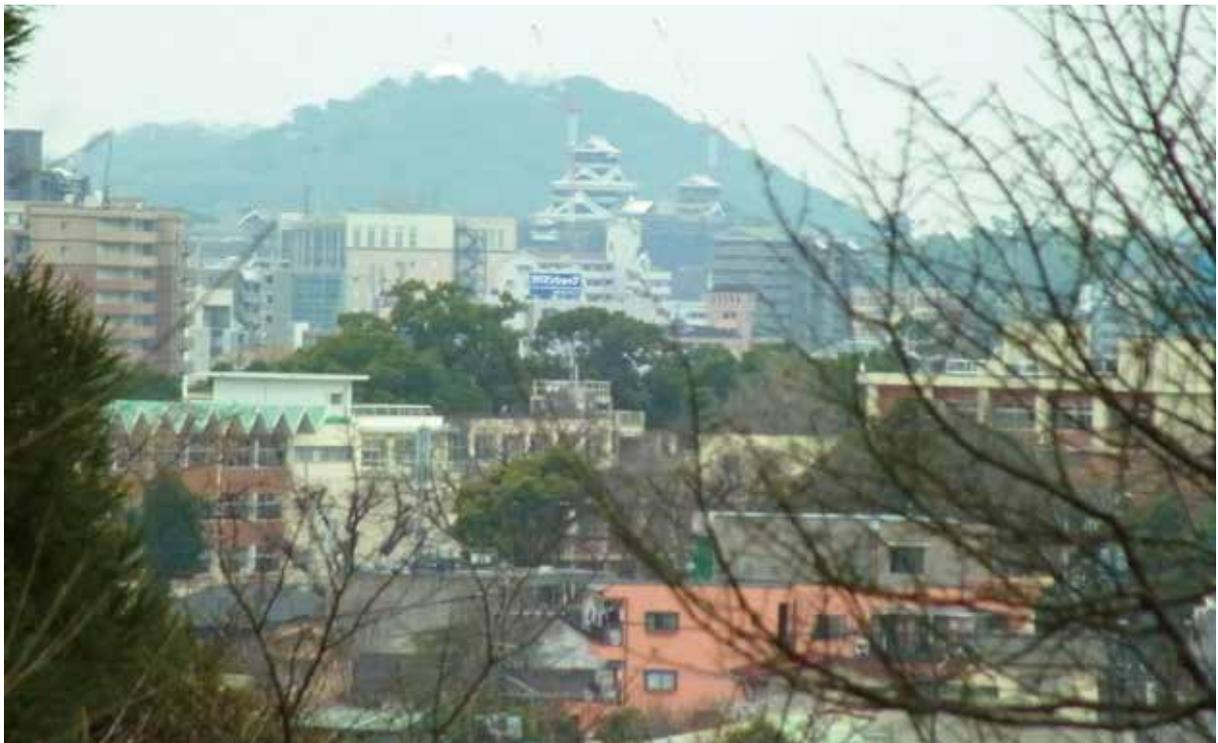


写真 23 下立田神社から西方を望む

主な引用参考文献

- 1953 坂本経堯 『荒尾野原古墳』 荒尾市 再録 1979 「荒尾野原古墳」『肥後上代文化の研究』 肥後上代文化研究所・肥後考古学会
- 1987 富樫卯三郎・高木恭二 「15. 神ノ木山古墳群」『宇土半島基部古墳群』 宇土市埋蔵文化財調査報告書第 15 集 宇土市教育委員会
- 1998 板楠和子 「第九節 文献からみた古墳時代の肥後」『新熊本市史』 通史編第 1 巻 熊本市
- 1999 今田治代 『野津古墳群Ⅱ』 竜北町文化財調査報告第 1 集 竜北町教育委員会
- 2000 中原幹彦 「熊本における須恵器生産開始の実体—県央地域を中心として—」『継体大王と 6 世紀の九州』 —磐井の乱前後の列島情勢に関連して— 熊本古墳研究会
- 2002 美濃口雅朗 『つつじヶ丘横穴群』 熊本市教育委員会
- 2002 中原幹彦・木村龍生 「神ノ木山古墳出土須恵器」『宇土市史研究』 第 23 号 宇土市教育委員会
- 2002 中原幹彦 「44 神ノ木山古墳群」『新宇土市史』 資料編第二巻第一編考古資料第三章古墳時代 宇土市
- 2003 高木恭二 「第三節 特色ある石棺の文化」『新宇土市史』 通史編第一巻原始古代編第四章古墳時代—倭王の時代— 宇土市
- 2003 中原幹彦 「第六節二 須恵器生産のはじまり」「同三 宇城産須恵器のひろがり」『新宇土市史』 通史編第一巻原始古代編第四章古墳時代—倭王の時代— 宇土市
- 2005 中原幹彦 「平底瓶と提瓶」『肥後考古』 第 13 号 肥後考古学会
- 2007 中原幹彦 「石棺輸送と製塩土器祭祀に関する試論—古墳時代後期集落成立の背景—」『大王の棺を運ぶ実験航海—研究編—』 石棺文化研究会
- 2009 木村龍生 「野原七号墳」『荒尾市史 前近代資史料集』 荒尾市史編集委員会
- 2010 木村龍生 「“オマツリ” のための古墳」『古文化談叢』 第 65 集 (2) 九州古文化研究会
- 2012 今田治代 『大野窟古墳発掘調査報告書』 氷川町文化財調査報告第 2 集 氷川町教育委員会

* 写真 4、6、7、8 は牛島茂氏撮影。他は著者撮影。